

推薦のことば

我が国の超高齢社会で嚥下障害は避けて通れない問題です。脳卒中や神経筋疾患、口腔咽頭の腫瘍など明らかに嚥下障害をきたす疾患もさることながら、誤嚥性肺炎、認知症、そしてあらゆる疾患による終末期には嚥下障害を来します。嚥下障害の知識と対策は多くの医師にとって必須のスキルと言っても過言ではないと考えています。多くの書籍や雑誌の特集号が出版され、研究会やセミナーなどが開催されていますが、嚥下障害を専門としていない医師をターゲットにしたものはありません。メディカルスタッフ向けのもは医師に必要がないか、あまり関係がなく興味を持ちにくいケアの視点が重視されていたり、専門家向けのもは難しすぎて理解しにくかったりします。本書はそれらの間隙を埋める「専門外の医師向け」に書かれた素晴らしい本であると思います。

どうしてこのような本が生まれたのでしょうか？ 本書編集の中心は谷口 洋先生です。現在は東京慈恵会医科大学の柏病院で診療を行う傍ら、月に一度、浜松市リハビリテーション病院に診察に来ていただいています。日本嚥下医学会などで活躍されるとともに雑誌「嚥下医学」の編集委員にもなっていていただいております。その谷口先生は神経内科の専門医ですが、ある日、当時私が所属していた聖隷三方原病院のリハビリテーション科の嚥下外来を見学に見えました。先生は嚥下障害の臨床と研究に興味があり、その後私どもの元で嚥下障害臨床の勉強をすることになりました。すごいのは同時に学位論文の研究も行い嚥下障害で学位（咽頭喉頭の感覚テスト）を取られたことです。当時、私は脳神経外科とリハビリテーション科の専門医であり、日常診療で困っている嚥下障害にリハビリテーションの視点を取り入れて、嚥下の診療をチーム医療としてシステム化するという仕事をしておりました。そこに神経内科の谷口先生が加わってくれたのです。これは大きな刺激となりました。その頃先生は専門以外の医師が嚥下障害を学ぶことに大変苦勞されたのでしょう。その後、東京の病院に戻られて嚥下障害の診療を継続されるのですが、周囲に嚥下障害を理解する医師が少なくさらに苦勞されたと思います。その想いが本書の誕生に関わっているのだらうと私は考えています。

さて、昭和60年代以前我が国の嚥下障害診療は耳鼻咽喉科中心に進められておりました。その後、看護師や言語聴覚士、管理栄養士、薬剤師、歯科衛生士などメディカルスタッフの関与、診療科としてリハビリテーション科、神経内科、歯

科がこの分野に興味を持って参加するようになりました。嚥下障害の診療にはこれらメディカルスタッフの協力と各診療科の知識と技術など総合的なアプローチが不可欠です。一人で行うことは到底できないのですが、臨床を行っている医師の目の前には必ず嚥下障害患者さんがいて、その対応を迫られるのです。その時どうしたら良いか、その「道しるべ」を与えてくれるのが本書です。私も通読いたしましたが、とにかくわかりやすく、医師が知りたいと思う知識や教えてほしいとおもう疑問に素直な答えが書かれています。

医師が一番困るのは、自分が知らないことをメディカルスタッフに聞かれることです。本書のタイトル「嚥下障害、診られますか？」とナースに聞かれて「ドキッとすか」とか、「任せておけ」と自信を持って答えられるか？皆様は如何でしょう？ぜひ、本書を通読し、手元に置いて自信を持って診療できる医師になっていただきたいと思います。

2015年7月

浜松市リハビリテーション病院 病院長

日本嚥下医学会 理事長

藤島一郎